

## 館蔵資料紹介 No.13

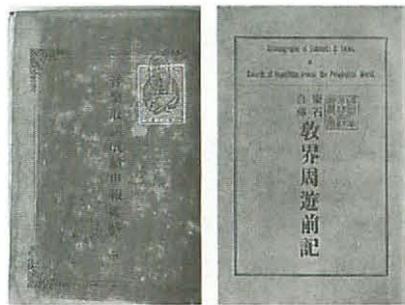
## 伊澤修二の「楽石自傳 教界周遊前記」について

末 永 豊

明治5（1872）年8月に「…必ず邑に不學の戸なく家に不學の人なからしめん事を期」して学制が制定、頒布された。小学校は6歳から13歳までとされ、「男女共必ス卒業スヘキモノ」と定められた。小学校の教科をみると、綴字、習字から博物学大意、化学大意まで18教科が置かれることになっている。また14歳から19歳までの中学校では国語学、地学、幾何代数学等が教えられることになった。興味あるのは音楽で、小学で唱歌、中学で奏楽として挙げられながら、唱歌は「當分之ヲ缺ク」、奏楽は「當分欠ク」とされ、実施されなかったことである。教師がいなかったし、教科書も教育法も開発されていなかったためといわれている。

文部省も手をこまねいていたわけではない。このころ欧米から音楽書や歌集、教科書を集中的に購入している。また、学制にともなって5年以降東京をはじめとして全国の7大学区に設置されていく官立師範学校に対して、唱歌、奏楽の教材や教育法を開発し、その実践例を文部省に上申するよう指示していたらしい。

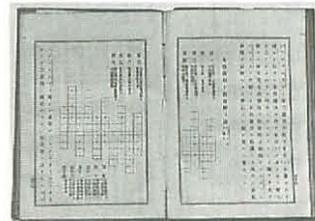
この時期に伊澤修二という逸材が学校教育にたずさわったことは、唱歌教育の実現とその後の発展にとって決定的な意味をもった。唱歌教育だけでなく、日本における音楽の近代化は伊澤をぬきにしては考えられないのではないか。



伊澤修二は1851年に信州伊那郡に生まれ、1917年に没している。かれは『教授真法（初編）』（明治8年）、『音楽取調成績申報要略』\*（明治24

年）、『楽石自傳 教界周遊前記』\*\*（明治45年）等の著作をのこし、あとの2冊が本図書館に所蔵されている。予期せず見つけたときは、すごい、と快哉を叫びたくなった。門外漢ながら、各々の分野における前の2冊の価値は高いのではないかと思う。

伊澤が直接音楽教育に携わるのは、明治7（1874）



年に学制にもとづいて新設された官立愛知師範学校の校長として名古屋に赴任してからのことであろう。校長としての仕事のかたわら、「小学教授法」を担

当する荒野文雄という教員の協力を得て著したのが『教授真法（初編）』で、これは「欧米教育論からの翻案としては本邦最初というべき教授法書」と評価されている。

『教界周遊前記』は抜群におもしろく、自伝（口述）だからどこかにはったりがあるのかもしれないが、だとしても伊澤を知るうえで第一級の資料であることに変わりない。

この自伝を読んで感心するのは、自己改良という点ではためらうことなく向上の機会を求めめるかれの姿勢、気概であろうか。さまざまな職場、立場、分野に身を置いた人だが、どこにいてもパイオニアの仕事をしたマルチ人間伊澤の秘密はこの辺にありそうだ。

たとえば英語の勉強。明治2（1869）年再度江戸に来た伊澤は正則英語（正則という語も伊澤が考えたものらしい）、つまり本も読めるし、実際に話せる英語を勉強したいと思うや、中濱（ジョン）萬次郎を発見して通いつめ、中濱が普仏戦争視察団に同行して不在となると、アメリカ人宣教師につく。のちにアメリカ留学中、フィラデルフィアの博覧会場で不思議な文字の掛図をみかけ、ここで通り過ぎないのが伊澤らしいというべきか、かれは博覧会の理事に掛図のいわれを訊き、「唾子に教える文字」であると知ると、考案者のグラハム・ベルをボストンに訪れ、「唾子にさへものをいはせる」ことのできる氏なら自分の「非常に悪い」英語の発音を矯正してくれるに違いないと教えを乞う。私はベルのことは電話の発明者としてしか知らないが、先生と弟子とのあいだで、電話をとおして最初に話されたのが日本語だったというのは本当だろう。ベルも伊澤から日本語を習いたいと言ったらしいから。伊澤はベルの「視話法」をもとに吃音矯正法や、国語正音法を

開発し、また台湾での日本語教育に活用している。

たとえば生き方の転換。老いをもって尊し、とする「老成主義」に見切りをつけること。官立愛知師範学校時代、同僚も学生も23歳の校長より年長だったこともあり、「余の老成的であったのは誠に著しく、40歳以上にみられていたという。ところが留学先の「ブリッジワートル師範学校」では若者が嬉々として遊び戯れるさまにカルチャーショックを受け、ここが伊澤らしいのだが「同しく七八十年の寿命なれば、則ち若々しく面白く暮らしたが可いと」考え直している。国家を背負って留学した時代にこれはかなりたいへんなことだったにちがいない。

たとえば音楽。伊澤は上記師範学校で歌だけはどうしても歌えなかつたらしい。校長は「貴国の音律は我米国のとは違ってをる」からと理解を示し、授業免除を認めたが、これでは国に帰れぬと「三日許は泣いて悲しんだ」という。悔し涙にくれるのは伊澤でなくてもありうる。伊澤らしいのは、やはり向上したいという気概を奮い立たせることだろう。かれはここでもよき師を求めて、ついにボストンにルーサー・ホワイティング・メーソンという音楽教育者を見つけ出す。明治12(1879)年に音楽取調掛が設置されるとメーソンはさっそく招聘され、日本の音楽教育の発展に尽力した人であるから、良き家庭教師との出会いということにとどまらない。



童謡「ちょうちょう」の原曲はスペインともドイツともいわれ、ドイツではフランスの曲とする説もあって確定できない。歌詞は野村秋足(あきたり)である。官立愛

知師範学校の校長となった伊澤は、文学、地理学、史学の教員野村に命じて、名古屋近辺の童謡を収集させている。学制に定められながら実施のめどのない唱歌の実験、実践に伊澤の意図があった。じっさいかれは自分の唱歌教育の実践例を文部省に報告している。ところで野村が伊澤に提出した童謡は「蝶々」「ひらいた ひらいた」等の3つである。尾張地方のわらべ唄「蝶々」はこう歌われていた。

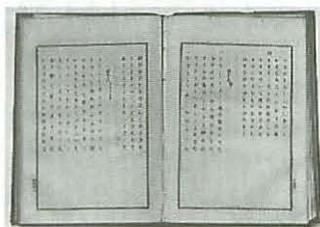
蝶々とまれ、菜の葉にとまれ、  
なのはがいやならこの葉にとまれ。

これを野村は次のように改作している。

蝶々蝶々。菜ノ葉に止レ。菜ノ葉ニ飽タラ。  
桜ニ遊ヘ。  
桜ノ花ノ。栄ユル御代ニ。止レヤ遊ベ。

遊ベヤ止レ。

現在の「ちょうちょう」との大きな違いは「栄ユル御代ニ」だった点で、



野村の国学者たる所以でもあるが、伊澤が「而して当時歌詞をば多少代えたが曲をば童謡其まゝに採用し、これに遊戯を加えて実行した」といっているとおり、官立愛知師範学校時代の「蝶々」はわらべ唄の旋律で歌われていたのである。

野村が改作したわらべ唄の歌詞が、こんにち私たちの知る旋律と出会うのは、ボストンのメーソン宅でのことである。「氏はラブレローの譜を余に示し、これは日本の子供の好に合ひさうな曲であるから、何か日本語で適当な歌を附けたら可からうと云った、そこで余は此蝶々の歌を附けて見た所が、偶然にも誠に能く適合し、メーソン氏も大に喜ばれた」と伊澤は回想する。別のところでは「今日我国学校唱歌發達の仁子(タネ)ともいふべきものは、早くもメーソン氏家隅の一室中に成立てるなりけり…」とも述懐している。互いに関係のない日本の歌詞とヨーロッパのメロディーとの偶然の一致は、愛知時代の唱歌確立の努力が間違っていなかったことをかれに確信させ喜ばせたことだろう。じっさい伊澤は唱歌を置く必要とその実施可能なことをアメリカから文部省に訴える。これがのちの音楽取調掛の設置につながる。取調掛の課題は「内外音楽取調」、「東京師範学校附属小学校、及女子師範学校附属幼稚園に実施」、そして唱歌を教えることのできる「傳習生」の養成であった。

音楽取調掛はメーソンを迎え、明治14年からの「唱歌掛図」、15年からの「小学唱歌集」、22年の「幼稚園唱歌集」と成果をあげていく。

「小学唱歌集」におさめられたとき、「蝶々」は稲垣千穎(ちかい)作の二番を与えられていた。戦後の昭和22(1947)年に文部省は「一ねんせいのおんがく」を発行し、ここで「栄ユル御代ニ」が「はなからはなへ」にかわるとともに、稲垣による二番は削除された。前者は超国家主義的なものを排除するという編集意図からして、後者は歌の主題を散漫にしないという配慮が感じられ、妥当な扱いだったと思う。

なお『音楽取調成績申報要略』については山住正己氏校注の『洋楽事始 音楽取調成績申報書』\*\*\*がある。

(すえなが ゆたか: 地域科学部教授)

(配置場所: 集密書庫\*760/1,\*\*289.1/220, 3階開架\*\*\*080/Toy)